
ブランコ

冴河冴

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ブランコ

【Nコード】

N1506E

【作者名】

冴河冴

【あらすじ】

私はブランコに乗ったことがない。だからね、すごくすごく、乗ってみたいって、思うんだ。何か悩んだ時、あなたが行く場所はありますか？*完結済み・近日改定予定

ブランコ

ブランコ

ブランコにのるシーンが小説や漫画でよく出てくるけれど、私は実はブランコに乗ったことがない。兄貴の話によれば一度だけ乗ったことがあるのらしいのだけれど、全然憶えていない。友達にそう話したら天然記念物でも見るような目で見られた。

親があまり外で遊ばせてくれなかったのと、近所にブランコがある公園が無かったのとの両方だったと思う。

とにかく大人になる前に、ブランコにのりたい。

私が何故こんなことを考えているのかというと、今無性にブランコに乗りたいたいからで、にも拘らずやはりこの近所にブランコがないからで。

何故ブランコに乗りたいたのかというと、どうしようもなく感傷に浸りたい気分だからで。

私は今中学生なのだけれど、幼稚園のときは神社のそばの坂、小学生のときは校舎の二階の窓に座って足を出すっていう風に自然になっていた。そのせいで怒られたこともあったけど、そこが私の一番落ち着く場所だったのだ。

中学生になつた今は学校の柔道場のそばの窓に座るのが一番落ち着く。二階だけど人に見つかることがほとんど無いし。

だけど今いるのは家だし、学校に行くには片道一時間以上かかるのだ。家の中で落ち着けるわけが無いし、近所にブランコのある人気がない公園もない。

気持ち悪い感情が抑えきれなくなってくる。

気分転換に勉強してみたり、CDを聴いてみたり、洗い物してみ

たりしたけど、それは暗鬱とした気分を助長しただけだった。読みかけの本も読む気にならなかったし、もうすぐで三時だけど昼食をとる気にもならなかった。最終手段、こんな理由で練習になるわけも無かったけど竹刀を振ってみようとした。が、筋肉痛で不可能だった。書くことも無いのに小説を書いてみようとしたけど、何も出てはこなかった。

本当に嫌な気分だったり、困ったときには何をやっても仕方ないのかもしれない。

いろいろ頭を捻ってみて、ゲームと歌をまだやってないことに気付いた。パソコン付属の大貧民をやってみた。凄惨たる結果だったので諦めた。チェッカーをやってみた。ルールを知らなかった。オセロをやってみた。パソコンに入ってた。かくして私はゲームはあきらめた。

歌に逃げることにした。『アジアン・カンファー・ジェネレーション』の歌だけは歌詞を覚えていた。心の波長と合いすぎて、私は歌いながら泣いた。涙と一緒にいろんなものが融けて流れていった。そのまま私は二時間歌って喉がつぶれて、ついでにすっきりした。

音楽は国境を越えるという。

いつか小説も、そんな存在になれるだろうか。そんな小説を書けるだろうか。

買い物

私はそつと袋を床に置いた。卵が入っているからだ。

私の友達のストレス解消方は買い物だけど、食料品の買出しなんてだるいだけだ。兄貴はというと米五キロが入ったリュックをおろして…否、落としているところだった。うだ話をしながら、私と兄貴は食い物を冷蔵庫にしまっただけだった。新任の先生の話とか、部活の話（兄貴は帰宅だけど）とか。

「数学のその新しい松本つー先生がいるんだけどさ、なんかやたらシラけるんだよね。自己紹介のときとかもう盛り上げるの諦めたから」

中学高校のとき物理部でしたってなんだよ。ていうか趣味がアマチュア無線って言われてもリアクションできねえんだよ。

「いるよな、クラスに一人はシラけ王」

「やつば高校も？」

「なんか面白いすべり方するから、みんな『よし、ここはシラけよう』って団結して黙るのさ」

「あー、そういうのは中学にはいないな。」そんなシラけ王だったらウチにもほしい。

「どんな感じなの？」

「誰かが面白いこと言ったとするじゃん。したら、『それは笑えるな』っていつも言うんだよ。いつきにシラけるね。」

「……きついな、それは。ウチの学年はそういう奴いないんだよね…なんか、ウチの学年ってなんか、違うから……」

「結束でもないし連帯でもないんだけどね……」

「前のクラスは楽しかったよ」

「ウチのクラスはそうでもないよ」

「うん。聞いてればわかる」

「そっちは楽しかったんだ。」

「うん。だからクラス替えですっごい悲しんでるんだ…」

私は悲しむことさえできないのに。
いや、僻みでしかないんだけどさ。

「そっちは、楽しくないんだね」

「…うん。……兄貴はさ、諦めてるんでしょ？家のこと」

「うん。っていうか、学校が楽しけりゃ我慢できるっつつか」

「じゃあ兄貴、学校楽しくなかったらぐれるね」

「うん、そうだねー」

兄貴はそう言って笑っていた。

私がつまづくじゃないのは、何も楽しいと思えないからかもしれない。私が素直じゃないのは、素の自分を出して拒まれるのが怖いのもしれなかった。

だけどやっぱり、兄貴を羨ましいと思ってしまっのに変わりはなかった。成績がオール5で、学校が楽しそう、将来やりたいことを親に認められている。兄貴にだって悩みがないはずがないのはわかっているのだけれど。

私は人を羨むだけで、何もできていない。そんなではいつまでも大人になれないことぐらいわかっているのに。

大人

でも、大人になるっていったいどういうことだろう。

20歳になることだろうか？社会人になって自立することだろうか？

全てを割り切れるようになることだろうか？全てに希望を見出せるようになることだろうか？人の闇を知り尽くすことだろうか？どんな人でも愛せるようになることだろうか？なんでも巧くこなせるようになることだろうか？

それとも、大人になるってというのがどういうことかわかることだろうか？

よくわからない。

というかそもそも私は大人になりたいのだろうか？子供のほうが楽でよさそうではないか？いや、それとも子供のほうが大変なのか？

もしかして、人はある程度歳をとると自動的に大人になってしまうのだろうか？それとも大人になれないで死んでいく『大人』と呼ばれる人もいるのだろうか？

これもよくわからない。

まあ、大人になるってことがどんなものであったとしても、私はきつと大人になれないままなんだろうけど。

諦めにも似たそんな気持ちを引きずったまま私は冷蔵庫に食べ物を詰め込んだ。種類だとか新しい順だとかは構っていなかった。適当に突っ込んだから酷くぐちゃぐちゃだった。

私の心もこんな感じなんだろうか。雑感で溢れて、汚れにまみれて、感情に溺れて。そのためにまた罪を犯して、悪循環に陥って。

なんだっていいけどもう冷蔵庫を見ていたくなかったので、私は乱暴に戸を閉めて部屋に戻った。私は畳に横になって、天井を眺め

ブランコ

ていた。

世の中わからないことばかり…否、私にはわからないことばかりだ
とりあえず寝てみよう。そうすれば大人になるってどんなことか、
何か思いつくかもしれない。

夢

私は幼稚園児だった。

兄貴のお下がりのベージュのズボン、青いセーターという格好だった。私はこの格好がいろいろ言われるのをわかっていているから嫌で仕方ない。

服がしまつてある引き出しを漁ってみたが、どれも兄貴のお下がりで変わり映えのないものばかりだった。全部同じだ。

だから私は仕方なくその格好で朝食の準備をして、一人で食べた。幼稚園に行く時間になったので、弁当と水筒を持って、私は家を出た。行きたくないけれど、サボれば親に連絡が行ってしまうのだ。幼稚園は徒歩20分ほどの所にあつてそのすぐ横に神社があり、裏手は山になっている。この辺りは田舎なので児童は少なく、それに比例し先生も二人だけだった。辺鄙な所である。

私はうつむきながら横断歩道を歩いていった。これから受ける仕打ちを思うと、道路に飛び込んで死んだほうがいいんじゃないかと思う。リュックを背負っていたらクツションになってしまうかもしれないからおろしておくべきだろう。

でも残念なことに、ここは車がなかなか通らないのである。飛び込んでも撥ねられない。それに気付いたとき私はもう幼稚園についてしまつていた。私は馬鹿なのである。

幼稚園の敷地にできるだけ時間をかけて入った。私は始業ぎりぎりまで車の陰に隠れて、奴らに見つからないように気をつけた。

*

「なあお前、なんでそんなシケたツラしてるわけ？もつと砂被りた
いのか？」

ブランコ

「……………」

私は黙っていた。

私は砂の上に腹を蹴られて横倒しにされ、砂をかけられていた。足と頭は踏みつけられて、身動きが取れない。泣く訳にはいかない。答えたら深みに落ちるだけだ。

「答えるよ。砂被りたいのだった。それとも徐々に階段落ちがいいのか？」

「っ……………」砂を被る屈辱感。階段を突き落とされた時の血の味。想像したくもないのにそのことが思い浮かんでくる。私は何も考えないようつとめた。

「じゃ」奴らの一人がにやりと笑った。その顔は見えないけれど、笑っているのははっきりわかった。

「両方で」

*

砂まみれになっていく服を思いながら、私は母親になんて言い訳をしようか考えていた。そうやって別のことを考えていなければ、自分が壊れてしまいそうだった。

私は何も見えない。

私は何も聞こえない。

私は何も感じない。

ブランコ

自分はもしかしたら人間ではないのかもしれない。だからこんな目にあうのだろうか。

みんなと自分が違うところを探してみたけれど、私には何も思いつかなかった。強いて言えば背が小さいことだけだ。
何故こんなことになったのか思い出そうとしてみたけれど、心当たりがない。

耳の中に砂が入りそうになる。意識が飛びそうになる。屈辱感と怒りで胸の裏が熱くなる。

私は乱暴に起こされ、どやされた。

「自分で歩けよ、チビ」答える気力もない。

そのまま神社の石段の上まで引きずられていった。

「立て。」

「立てよ。立てつつてんの聞こえねえのかよ」私は肩甲骨を殴られ、よろよろと立ち上がった。

私は突き落とされ、背中から石段を落ちた。

朦朧とした意識の中、世界が五倍速で流れているかのように色が流れていく

「く、いつ」

酷い痛み飛びかけた意識が戻ってきた。堪えていた声が小さく漏れた。

全身が怒りと痛みで燃えるようで、同時に凍えるようだ。私は立ち上がった。ひざが鋭く痛んだ。

「私、何もしてない。なのに、なんでこんな目」お前の苗字が桜井だから。」

「……は……？」

「お前が気に入らないつつてんだよ！」

そいつはドロップキックを全体重かけて放った。

よける余裕もなく、私は石段を落ちていく。ぎゅっと目をつぶっ

ブランコ

て、私はこのまま死ぬことを願った。閉じた目から涙が溢れた。

刹那、背を焼くような痛みと広がる血の色に世界が染まった

記憶

私は頬を伝う涙を拭った。ゆっくりと起き上がって、霞んだ視界の中、思った。もう八年も前の話なのに、私はまだ囚われていた。あのしばらく後、奴らのリーダー格だった少年は交通事故で死んだ。

私はそれを聞いて静まり返った園児でただ一人、喜びを悟られぬよう、声を堪えた。人の死を喜ぶことは不謹慎だということくらいは知っていたからだ。別にその頃は恐れたような目で見られたいわけじゃなかったから。

空恐ろしい幼稚園児だったと思う。というかあんなに何度も階段を落ち続けたのにまだ生きているのを不思議に思う

まあとにかくその後は卒園までいじめられることもなく日々平和に無事に過ごせた。全身に残った痣と打ち身の言い訳には苦労したけれど。

小学校が上がってまた同じ理由で少しいじめられることになるのだけれど、そんなことは知る由もなかったし。

とにかく、もう終わった話なのだ。あれから八年が経ち、向こうはこっちのことなんか憶えちゃいないだろうし、私だってもう忘れてしまいたいことなのだ。

私は間違いなく大人ではなかったし、今だってそうだ。

奴らだって子供だったし、おそらく今もそうだろう。

私はまだ、彼らを怨んでいるのだろうか。私はまだ、奴らに縛られているんだろうか。よくわからない。

縛られている限り、大人にはなれないのだろうか。割り切れない

限り、子供のままなのだろうか。よくわからない。

ただ思うのは、大人になったことはないから知らないけど、子供だってそれなりに大変だと思う。私はどうしても大人になりたい。どんなものでもきつと、今よりはましな筈だから。変わるならそれでいいから。

こんなことを言ったらきつと、大人の人たちは笑うのだろうか。

成長（前書き）

本当に申し訳ありません

別の小説のはなしを投稿してしまいました…

前は繋がらなくて訳が分からなくなっていたと思います
以後気をつけます

ごめんなさい……

ブランコ

成長

今日は七時間授業だ。

中二になったので、クラス、担任、教室などいろんなことが変わった。クラスは微妙だけど、担任は最高だ。きっと私は今年中の運を全部ここで使い切ってしまったに違いない。

一番大きいのは部活だ。後輩ができる（新入部員がくればの話だけど）のだ。どう接すればいいのかわからない。

素の私で行けば引かれること間違いないだろうし、一つしか歳が違わないし大して部活ができるわけでもないので大きい態度は取れない。部活を冒険してる奴に会って殴らずにいられるだろうか。でも先輩が新入部員を殴ったなんて、剣道部の名を汚すようなことはなんとしても避けねばならない。そんなことで部活停止になんざなったら、みんなに合わせる顔がない。

後輩なんて面倒だ。取り敢えず今のところの私の本音

……去年先輩方もこんなことを考えたりしたのだろうか。

そんなことを考えているうちに教科書が配布され、名前を書くようにとの指示があった。私はマジックで名前を書いていく。

「……あ、やべ」中一と書いた教科書を見て舌打ちした。今は中二だっつーのに。

その文字にお前は変われてなんかいないと言われたような気がして、胸が小さく痛んだ。

私は中学に入ったときのまま全然変わっていないのかもしれない。限りなく愚かで、生意気で、全てを傷つけて。そして少しは変わった筈だと自分に言い聞かせて。

ブランコ

認めたくなんかないけど、ひよっとしたら生まれたときからなんにも変わってなんかないのかもしれない。

犯した罪が、増えたというだけで。壊れた心が、荒^{すさ}んだだけで。それは自分のこの一年間を全て否定することだけれど。認めようが認めたくなろうが、変わってなんかないことは本当のことなんだから。

変わったねってよく言われるけど、本当はなんにも変わっちゃいない。心の奥に本音を隠すのが少し上手になっただけ自分さえ騙せるほど嘘が上手くなっただけだ。

心臓を流れる冷たい感情は消えちゃいない。それが誰かを傷つけ続けることに変わりはない。その運命^{さだめ}は変わることができない。そうやって苦しむべきだから

わかったよ みんな。今度こそ本当に

私は変わってなんかない

私は全然、変わってなんかない

ブランコ

蒼（前書き）

今回は短いです

蒼

2時間目からは平常授業だ。私は英語のクラスへ向かった。出席番号順で窓際の席に座った。

『キーンコーンカーンコーン』

「やっべ、先生来たぜ」

その声の後に、立て付けの悪い戸の音がした。

『ガラッ』

そして規則的な足音

「こんにちは。君たちの英語を担当することになった山田です。えっと、今年赴任してきたばかりなので、よろしく」

私は窓の外を眺めていた。遠くには山が見えて、それは少し霞んでいた。空には雲が垂れ込めて、今にも雨が降り出しそうだった。

綺麗な蒼い空は、私の目も同じ色に映った。

私がどうなっても世界は変わらない。変えられない。私が変わることはできない

限らない罪を犯したまま、償うことさえできずに死んでいくだけ

私は何も知らなかった。私は何もわかってなかった。わかった気になっただけ。自分が少しはよくなれたと信じようとして根拠もないくせにそれにしがみついて

結局これ以上罪を犯さぬために死ぬと行って、そんな偽善的で独善でしかない思いを抱いて、保身に走って。ただ自分のしたことを忘れるために、罪と向き合うのを拒んだんだ

片をつける為に自分を知るのが怖かったんだ。

「くっそっ」

なんでこんなに自分は汚くなったんだよ。いつから目を逸らして、忘れようとしてたんだ

人のことを考える前に自分の保身を

助けてくれた人まで疑って際限ない猜疑心を抱いて

どうして、私は……………

虚

気が付いたら授業が終わっていた。気が付いたら一日が終わっていた。気が付いたら夜が明けていた。

私は防具袋を持って学校に向かった。駅に向かつて歩き、電車に乗る。生きている気がしない。あらゆる情報や出来事が、目の前をただ通り過ぎていく。楽しいこともなければ嬉しいこともない。

感じるのは人に向けた憎しみと、生まれてきてしまったことへの後悔。自分の罪深さ。闇を知った悲しみと、繰り返す日常の空虚さだけ。

ただただ辛い。

ただただ痛い。

何故人は生まれるのだろうか。何故人は生きるのだろうか。何故生きてなくてはならないのだろうか

何故人は感情を持つのだろうか。なぜ人は傷つけずにはいられないのだろうか。何故人は傷つかずにはいられないのだろうか。何故人は人を憎むのだろうか。何故心はうまれたのだろうか。何故言葉を知ったのだろうか。何故愛されたいと願うのだろうか。何故世界は不平等なのだろうか

悲しい夜が明けても、孤独な日が始まって、意味のない今日が終わっても。

答えを見つけたはずの問いが、答えの出ない思いになって私を支配する。

何をして意味を成さないのに、生きている意味などあるのだろうか。誰もを傷つけるだけなのに、私は生きることを許されるだろうか。誰も愛することなどできないのに、感情を持つ意味などあるのだろうか。誰にも愛されることなどできないのに、私は生きることを望まれるだろうか

そうなのだろうか？

そんなわけはないよな。そんなわけがないよな

私はいつも、根拠もないのに光が差すことを信じていた。幻かも
しれないとか、本当にあるのかだとか、途絶えることはないのかと
か、光に意味があるのかとか。そんなこと考えつきもしなかった。
考えようとしなかった。

今日も一日が終わる。

明日も一日が始まる。

くすんだ蒼い空はそれでも綺麗で、やっぱり生きてる気はしない。
浮かぶ雲は白いけど、やはり誰にもその存在を望まれてはいない。

電車はゆっくりと駅を発車した。

ブランコに乗りたい

私は急にそんなことを思った。

憂鬱さも苦しさも、蹴りだせば全部消える気がした。虚しい思い
も消せるような気がした

でも残念ながら、私の知っているところにブランコはないのだっ
た。

白

電車が学校の最寄り駅に着いた

同級生と一緒に学校へ行こうと声をかけてきた。私はそれに流されるように応じる

言葉にどんな力があるというのだろう。言葉にどれだけのことができるというのだろう

話すことに何の意味があるのだろう。伝えることに一体、何の意味があるのだろう。何の為に私は言葉を憶えたのだろう。私にはもうわからない。私はもう言葉を忘れてしまった。伝えたいことも、そうする意味も忘れた。唯一持っていたそれを失ったんだ。

冷たい朝の空気と喧騒のなかを、一人きりで歩いているような気がした

「あいつはほんと、幸せそうだよな」

陰でそう言っていた彼は、私をどんな目で見ていたのだろう。そう言われて私が感じたのはなんだっただろう。誰にも気を使われないことを望んだ筈だったのに

「いいね、あんたはやりたいたいことができてる」

そう言った彼女は、不幸なのは自分だけと思いついでそれに浸ってでもいたのだろうか。やりたいたいことができる人が、何人もいるとでも思っていたのだろうか。何の我慢もしないで送れる人生があるとても、そして私がそれを歩んでいるとても思っただろうか

「君はお兄ちゃんにそっくりだよ」

そう言ったあの人は、私のどこを兄と較べていたのだろう。私の、

そして兄の何を知っていたと言うのだろうか。私はそれを聞いて何を考えたのだろうか

「お前は恵まれてるんだよ。感謝しろ」

そう言っていたあの人たちは自分たちの所為で人がどんな思いをしていたか、わかっていなかったのだろうか。陰で何を言われているか、思われているか知らなかったのだろうか。自分が殺した人を、犯した罪を覚えていないのだろうか

世界に一人でいるような孤独感が私を襲う。

私にはわからない。そしてわかりたくない、知りたくない闇

似たような時続きすぎて、こんなことを思う前どうやって生きていたのかわからなくなつた。どうやって普通でいたのか・・・そもそも普通だったのか忘れた
いつそれも感じないほうが楽だろう。そうはなれないのは、私に科せられた罰だろうか

私の思考は引き戻された

「ねえ、聞いている？」

彼女

「ナナ？」

私は慌ててそれに答えた

どうせ憂鬱な思考だったのだ。それも放棄する

「ごめん、何？」

「…ナナは好きな人とかいないの？」

ちよつと迷う質問だった。

「……いるけどね、高嶺の花だから諦めてる。」

私の好きな人はなぜかいつも年上で眼鏡で（私は年上好きではないしあまり眼鏡も好きじゃないのだけれど）、そして他人には微妙と言われてしまうのだ。その辺のことは話したくなかったので、私は矛先を彼女のほうに向けた。

「そつちは？」

「いないよ」

「イイ男がいないから？」

「だってみんな幼稚なんだもん。それに金さえあれば誰でもいいし金ねえ……そんな選び方、私にはないな……」

そんなどうでもいいことに意識を集中させ、空虚さを紛らわせてみる。その場凌ぎでしかないけれど、その場だけでも凌げるなら、それでいい。

「それって、虚しくない？」

「いいよ別に。どうせ死ねば終わりだし」

「もしかして……」私は慎重に言葉を繋ぐ

「死んでもいいと思ってる？」

「うん。思ってるよ」

彼女は当然のことのようにそう言った。まるで……昔の私みた

いに

どこか諦めたような……だけど完全に割り切りきれてはいないよ
うな

そう考えると私は、人生の選択肢から死ぬことを捨てたということ
ころは変わったのかも知れなかった 果たしてそれがいいこ
となのかはわからないけど

「……………ずるいよ」

そういった私を、彼女は驚いたような目で見た。そりゃそうだろ
う。多分、そんなことしちゃだめだよ、死なないでよみたいな月並
みな言葉を予想してただろうから。

甘ったれるなよ

そんな言葉を飲み込んだ。

私は昔彼女と同じように考えてたけど、今は違う。彼女に今のま
までいてほしくないと思うのは、私のエゴだろうか。

「自分は一度も悪いことしてないって言うの？違うよね？」

「そうだけど…？」

「だったらさ、償おうとは、思わないの？」

私にこんなこと言う資格ない。そんなことはわかってる。

けどどうしても言わなくちゃならない気がして、私は彼女とち
やんと話すことにした。

お節介

甘ったれてんのは自分も同じだけど、そんなことは遙か高い棚の上に放り上げて話した。

それは自分でも笑ってしまいうくらい綺麗事ばかりだった。

彼女を救いたかったから話していたのか、自分の憂鬱を紛らわせるなら何でもいいから集中したのか、それはよくわからない。

「じゃあ、罪なんか犯したことがない、ましてそれを償う必要なんかないから死ぬ、そういうことなわけ？」

彼女はそれを全力で否定した。

「違う。私はこれ以上罪を重ねたくないから、」

「死ぬって言うわけ？ そんなの自分勝手だよ。逃げでしかないよ。」

私は全力で言葉を繋いでいた。流石に、だから私生きてるんだよとは言わなかったけど。

「私は……」

彼女はゆっくり息を吸ってから言った。

「ナナみたいにはなれないよ」

彼女はそう言って去っていった。

「便利な言葉だよね、それ。よく私も言うけど……ていうか私みたくになりたい人なんかいるわけないけど」

私はそう呟いて、自分のやったことのアホらしさにちょっと泣いた。中途半端に声を殺して、その辺の人に顔を見られないように俯いて。

ブランコ

「綺麗事ばっかじゃん……自分だってできてないくせに、助けるとか思い上がって……できもしないこと人に言うなよって……」

泣いても戻らないし変わらないのはわかってたけど、やっぱりちよつと泣いた。

自分がアホで馬鹿でどうしようもないことぐらい、わかってたつもりだったんだけどな。いろんな人に言われすぎて言われ慣れて、深く考えなくなったのかも知れない。

どうにかしよう。

でも私、彼女の気持ち、わからないわけじゃなかった。それでわかったから、そんなに苦しい生き方をしてほしくなかった。

もし昔いじめられなかったら、死にたいなんて一度も思わないで人生送ってたなら、その気持ちの1%もわからなかったかもしれない。うん。そういう意味ではあいつらも役に立たなかったわけじゃない。感謝しておこう。

憎みすぎて名前忘れたけど。

道しるべ

小説や漫画やドラマならば、「ハッピーエンド！これで終わり！」
でいいのだからうけど、現実世界の人生は終わらない。これからも手
は抜けないのだ。

なんだか気だるさはどこかに消し飛んだけど、自分のやったこと
が消え飛んだ訳では全然なくて、だから私は日々変わる努力をして
るわけで。ガラにも無く日記なんかつけてみたりなんかして、反省
したり後悔したり、だけどなんだかんだで生きている。

死のうかなとか死にたいなとか、誰か殺してくれないかなとか、
そんなことを思うときもあるけどだから人生楽しいんだよとかはも
う全然思わないけど、上手く折り合いをつけられるようになった筈
だ(？)。多分。

人生なんか楽しくなくてももう別に構わない。ていうか楽しさを
求めるのはもうやめた。

だったらこっちが引いちゃうくらいMになっちまえばいいだけの
話だ！（いや、違うよ嘘だよ引くなよ）

ぶっちゃん、今楽しめればそれでいいかなあ、なんて。

なんで変わったのかはよくわからない。ていうか何であんなに悩
んでたのがもう思い出せない。

でも、それはきつといいことだ。

思い出せなくてもとにかく、半端ない人数の人に迷惑をかけまく
ってしまったこと、そして助けてもらったのはちゃんと憶えてるか
ら、いつか、ちゃんと謝ろうと思っっている。

なんだか随分と適当な性格になってしまったようだけど、欠点だ
といわれていた考えすぎることが直ったのならまだましというもの
だろう。ああ、あと後ろ向きの思考も。必要以上にある猜疑心も。

ブランコ

私にブランコは必要ない。

どうしようもなくなった時に頼れる人がいるってことを、私はよ
うやくだけどちやんとわかったから。

道しるべ（後書き）

もうつくづくバカな話でごめんなさい……終わりあたりの展開が急過ぎで強引です…。

こんな話を最後まで読んでいただいておりますがありがとうございます。

変なところがいっぱいです。近いうちに改定いたします。その時に気が向いて、もしまた読んでいただけたら、作者天にも昇る気持ちです。

そして、感想、評価、ご指摘などもお待ちしております！間違っているところや誤字脱字、矛盾しているところなど、作者が見落としているところがまだ多々ありそうなので、すみません、お願いします教えてください。

長くなってしまいましたが、本当に本当にありがとうございます。た。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1506e/>

ブランコ

2009年3月24日09時21分発行